

令和7年度 幼児教育研修（年齢別担任研修3歳児・第1回）
「子どもの発達と保育者の関わりについて」
～3歳児の遊びの世界をともに楽しむ～
日時：令和7年5月20日（火）15:00～17:00
会場：ギャラクシティ
講師：東洋英和女学院大学 教授 塩崎 美穂 氏



3歳児の遊びの世界を一緒におもしろがろう

「イッチョマエ」が誇らしい【感情】

できないことも一人前に「なんでもできる」と感じる自信満々な感情が「イッチョマエ」の意識である。友達から認められる「誇らしさ」が「イッチョマエが誇らしい」と感じる源になっている。

例

(2歳)

「すごい!かっこいいね」



その気になる
(理由はわからなくても喜べる)



移行期
(プライドの変容)

(3歳)

「すごい!かっこいいね」



どんなことがすごいのか?
(すごさの内容が気になる)



やってあげる!

なんでもできるよ!

自分の存在をアピール
したい自信満々な姿

ポイント

自分がしたいことができる環境が整っていることが大事



注意されても「キョトン」【論理・直観】

3歳児はおもしろいことにしか興味がないので、思いもよらないことを次々してしまう。だから叱られることもあるが、叱られる時「なんでそんなに怒っているの?」とでも言いたそうに「キョトン」としている。(論理)しかしその姿が3歳児なりの気付きでもある。



ポイント

やったことの意味をどんな風に
捉えるのが大事

ほんの一瞬だけ存在する気付き(直観)があるのが3歳児。
4歳児のように繰り返し立ち戻る思考ではない。



自分の心体が外の世界と混じり合う「ボーダーレス」な感覚【認識】

嬉しさや楽しさが源泉
になっている

自分とまわりとの境があいまい

自分の世界で黙々と遊ぶ3歳児。同じ場にいながらも、お互いに直接は関わりをもたない「並行遊び」がよく見られる。このように、自分のしたいことに没頭できている時、「自分と他」、「自分とまわりの世界」がはっきりとは分かれていないような感覚をもっている。



イッチョマエ(感性)
キョトン(論理)

ボーダーレスな感覚が
支えている

ポイント

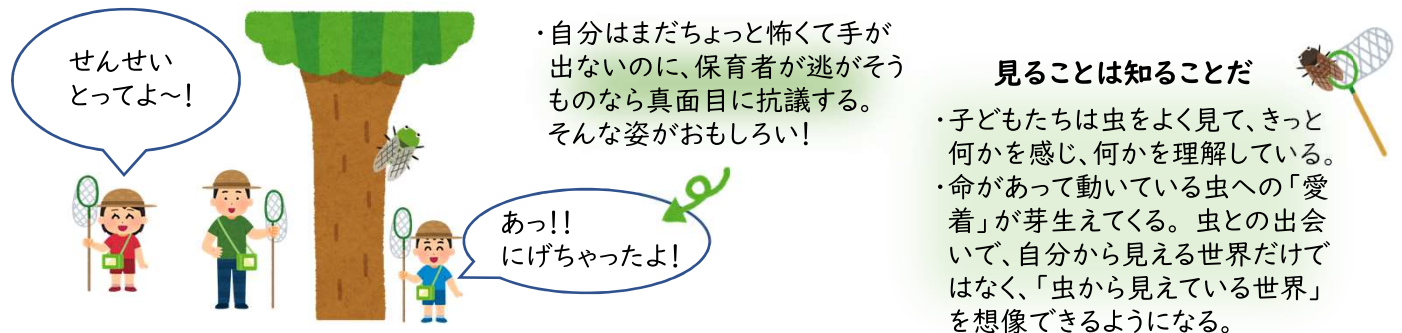
子どもが話したいことを話したいから話をしてくる。「うんうん」「そうだね」「知ってるよ」など、一人一人の言いたいことをよくきいていくことが大事



子ども自身が新しさを発見する実践事例

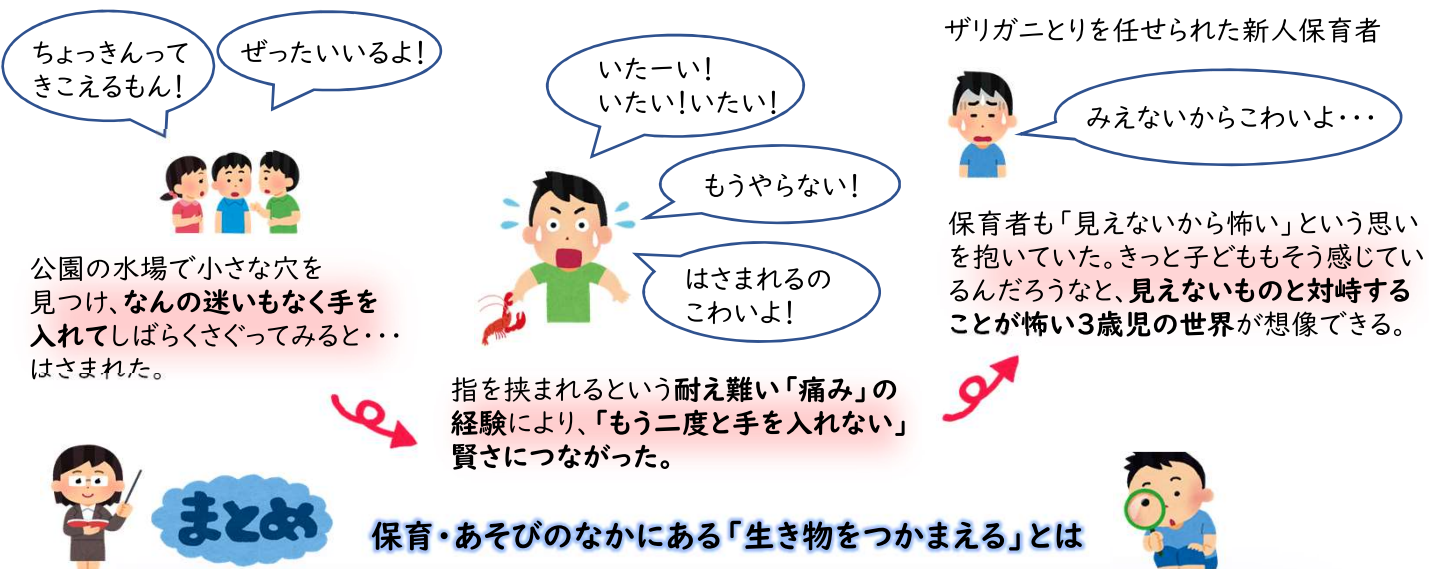
虫とり：命を感じはじめる3歳児

ある夏の日、「セミとり」に出かけました。高い所にとまっているセミを見つけ、子どもたちはベンチやアスレチックに上り、網を近づけてもなかなか届かないので保育者にたのみに来ました。取り逃がさないように保育者が必死になります。



ザリガニとり：ちょきんって聞こえる!

野イチゴ摘みの散歩を変更して「ザリガニとり」になりました。予定通りではない判断をしている日ほど、面白さは高まり、こうした散歩自体が「探索・探求の宝庫」、試すことの連続から成り立っている。



★「本物の虫に出会うドラマ」こそ、一緒に体験したいと願う保育者がたくさんいる。虫との出会いが「子どもの何かを変えた」という手応えをたびたび経験しているからだと思われる。生き物に触る経験は、「虫やザリガニの次の動き」を予測しようとする直観的な集中力が必要。こうした我を忘れるほどの熱中が、一歩先を読む直観を働かせる経験となる。

3歳児の世界をおもしろがろう

★3歳児なりの感じ方や論理を知ることが大事。「できた・できない」の評価を知るために、発達理解をするわけではない。だからこそ、3歳児の世界を理解し、子どもたち一人一人の感性と一緒に「おもしろがる」ことが乳児から幼児に向かう3歳児保育を作り出す出発点となる。

★虫とりやザリガニとりには、「野性的なものがあるところ」が、私たちの心を捉えて離さないことに通じる何かを感じる。人間の中に眠る野性的な心像世界が、「自分のことを大切に感じる感性」つまり3歳で花開く「イチョマエ」意識の土台につながっているのかもしれない。

研修生の報告書より

子どもの声を聞くということは、子どもたちなりの感情や論理を理解しようとすること、評価するために保育をしているわけではないことを学び、子どもとの関わり方考えられました。子どもの声を聞いて保育をしている中で無意識な大人の論理感を子どもに押し付けることがないよう意識していきたいと感じた。

「イチョマエが誇らしい」という言葉が今保育をしている子どもたちの姿そのもの。自信満々に様々な遊びなどに取り組む子どもの姿をもっと大切にしたいと感じた。まずは自分なりに楽しむことが大事だということにも気づき、焦らずに目の前の遊びを一緒に楽しみたいと思った。